

論文の内容の要旨

論文題目 保田與重郎——保守知識人はかく考えき

氏名 小松原 孝文

本論文では、昭和期に評論家として活躍した保田與重郎（一九一〇～一九八一年）の思考の軌跡を明らかにする。戦後最も早く保田與重郎を論じたものとして、橋川文三の『日本浪漫派批判序説』がある。これまでの保田に関する評価は、ほぼこの橋川の議論を踏襲しており、保田は合理的なものを破壊して美的なものへ逃避しているという評価が今日でも一般的である。

従来の研究では、保田の思考を長い期間にわたって検討するということがほとんど見られなかった。近年では保田の言説がどのように生成されたか検証する研究もあるが、保田のテキスト自体の考察は十分に行われていない。こうした背景には、保田の難渋な文体というものがあると思われる。一読して意味のわからない保田の文章は、保田をテキストから遠ざけるとともに、非論理的で美的なものへ逃避しているという橋川の評価を再生産することになった。

本論文では、このような従来の保田に対する見方を再考することを目的とする。保田のテキストを初期の段階から敗戦後まで長いスパンで見えていくことで、保田の思考を体系的に捉えるとともに、論理がないと言われてきた保田にも実は理論というものがあり、その理論に沿ってテキストが検証できることを明らかにしたいと思う。

まず、保田の文学活動の理論的な基盤を把握するために、初期の文学に関する評論に着目した。ここで扱う初期とは、保田が仲間たちと『コギト』（一九三二年三月創刊）を立ち上げてから、『日本浪漫派』創刊の広告（一九三四年十一月、雑誌創刊は翌年三月）を出すまでの時期で、この時期に保田は文学について論じた評論を継続的に発表している。

保田の文学理論は、言語と現実の乖離のなかで、作家が己の「真実」を描くために無限の問い直しを行うというものである。こうした無限の反省を繰り返す運動は、ドイツ・ロマン派のフリードリヒ・シュレーゲルが掲げた「イロニー」に通じるものである。しかも、このような無限の問い直しについて、その問い直した結果を記すのではなく、その問い直す過程を記述していくことが、保田の考える文学である。そのため自分で書いた言葉でさえ、次には問い直しの対象となり、主体の同一性を崩す方向へ保田のテキストは向かうのである。

他にも、保田は歴史的に近代の作家の在り方を考察し、読者の側に作品の意味を見出す可能性を求めるなど、後のテキスト論を先取りするような議論も展開している。このように保田は非常に理論的に文学というものを考えており、そこで示される理論は保田のその後のテキストを読む手がかりにもなるだろう。

そこで本論文では、このような保田の文学理論をふまえつつ、次に保田の代表的なテキストである「日本の橋」について検討した。このテキストは、論理を無視して美しい橋を感覚的に書き連ねているとしばしば論じられてきた。しかし、それは保田の論理を固定的に捉えることに問題があったのではないかと考える。自分の言葉さえ問い直していくという保田の理論に基づくのであれば、固定的な論理でこのテキストを論じることはできないはずである。

例えば、「日本／ローマ」と語ったとしても、そういう対比を軸に語る自らの言葉自体を反省し、作り替えていく動きが、このテキストには見られるのである。それは差異の戯れを利用した言葉遊びのようにも見えるが、固定的な二項対立を脱臼させるという戦略から浮かび上がるのは、橋という境界をめぐる歴史である。

橋は、此岸と彼岸の間に架けられ、両者の空間を分離する境界となるとともに、二つの空間を結合するものでもある。そのため橋は此岸と彼岸の交通を媒介し、両者の交流を促すものでもあった。こうした交通の歴史を語りつつ、保田が批判していくのは、近代のヨーロッパ中心の歴史観である。起源を措定して己を特権的に切り分けるヨーロッパの言説に対して、橋に着目した交通の歴史は、固有性や主体性を崩していくのである。

確かにそれは、「日本」というものの固有性や主体性を揺るがす可能性ももつ。だが他方で、保田の歴史観も近代国民国家のなかで作られた当時の美術史の言説のうえに築かれており、「日本」が解体されるかにも見えても、依然として強固な「日本」へ回帰する動きがある。それは保田が「日本」というものを実体としてではなく、手法として提示していることとも深い関係があると思われる。

こうした問題は、保田が古典を問題にすることとも関わることである。保田の古典を考えるために、本論文ではヤマトタケルと後鳥羽院に関するテキストを検討した。保田が古典に注目する背景には、同時代の日本回帰の動きがある。しかし、保田の議論は同時代の国体や日本主義の言説に題材を重ねつつ、その中身は一線を画するのである。

「戴冠詩人の御一人者」では、古典の英雄であるヤマトタケルが論じられているが、「武人」であり「詩人」でもあるというヤマトタケルの在り方は、近代の天皇の在り方と重ねて論じられている。ヤマトタケルは、景行天皇の命により、各地の抵抗する豪族を服属させていくが、一方でそれは「言向け」という言葉の問題としても語られている。

同時代の言説では、ヤマトタケルの物語は、忠君愛国の精神を涵養するものとして語られていた。しかし、保田はそのような勇ましい英雄像ではなく、「悲劇の英雄」としてのヤマトタケルに注目する。天皇の命令で西に東に遠征し、遠征の途上で誤った言挙げをしてヤマトタケルは犠牲になった。そこには保田の「言霊」の問題もあるが、統帥権をもつ天皇の命で戦争を遂行していた時局に対する批判的な側面もあると考えられる。

後鳥羽院も時局のイデオロギーとは異なる文脈で論じられていた。保田が後鳥羽院を問題にするのは、日本の「芸文」の流れが、すべて後鳥羽院に結集すると考えるからである。そこには大きく分けてヤマトタケルにはじまる「至尊の歌の流れ」と、大伴家持にはじまる「サロンの流れ」の二つがあるが、こうした保田の考える文学史の中心に後鳥羽院は位置づけられるのである。

その契機になったのが芭蕉である。芭蕉は世俗を離れて諸国を旅したが、それは傾倒する西行への追慕のみならず、政争や戦争で追放や逃亡を余儀なくされた古人たちの記憶をたどることであった。後鳥羽院もまた幕府との戦いに敗れ、配流先の隠岐で新古今和歌集の改編を進めている。こうした隠者の文学史を日本の文学史の中心にすえるのも、時局の言説とは距離を置いたものであろう。

このような戦前の立場をふまえつつ、最後に戦後の保田のテキストを検討した。保田は戦後最も危険な右翼文士として厳しく糾弾されることになる。しかし、戦前のテキストとのつながりを考えるとき、保田の言説が戦争推進か否かといった単純な枠組ではとらえられないのは明らかである。本論文では、こうした保田の戦後の立場を見るために、「みやらびあはれ」と「絶対平和論」を取り上げた。

「みやらびあはれ」は、「一昨々年の三月某日から昨年五月某日まで」の「あらまし」を書こうとするものである。この期間は保田の従軍期間のことを指すようだが、実は一年のずれがある。そこから浮かび上がるのは、このテキストの真のテーマともいべき沖縄である。保田は個人の記憶の忘却を嘆きつつ、沖縄に対する社会的な記憶の忘却を問題にしているのである。

その際に、保田は想起というものを重層的に積み上げていく。同じことを時間的な文脈を変えて繰り返し想起することで、自分の言葉も何度も問い直されていくのである。そこで保田は自分たちの過去の活動を振り返りつつ、戦中に出会った沖縄出身の医師について語る。その医師との邂逅から、保田はかつての自分の沖縄訪問や沖縄戦を想起し、甘美な物語を夢想するのである。だが、この想起は、沖縄が日本の領土から失われていった別の時間のなかで、再び想起され直す。そのこと

で自分の甘美な夢が崩れるとともに、沖縄が何重にも本土から見捨てられた記憶が浮き彫りになるのである。

同じく戦後のテキストとして、最後に一連の「絶対平和論」を取り上げた。このテキストは、戦争放棄を宣言した戦後憲法の解釈が問い直され、朝鮮戦争を機に日本が再軍備へ向かうなかで書かれたものである。そこで語られるのは、「近代」に対する明確な否定である。保田にとって「近代」という時代そのものが、戦争と不可分に結びついているのである。

保田の「近代」に対する捉え方は広いが、ヨーロッパが誕生以降、世界各地に植民地を作って世界を席卷し、他の地域との間に「支配／被支配」の関係が築かれていく時代を、保田は基本的に「近代」と呼んでいる。そして、こうしたヨーロッパ中心の「近代」に乗り掛からない「生活」を、保田は模索するのである。

そのため保田は、近代の所有権や主権を否定する。代わりに持ち出すのが、「事よさし」のような古典の概念である。土地や労働には特定の所有者がいるのではなく、「神」と耕作者の間で土地や労働が分ち持たれるといった「事よさし」の発想を、おそらく保田は求めている。それは古代の美化や理想化にもつながりかねないが、こうした別の理論を示しつつ、保田は「近代」そのものに乗らない道を説くのである。

以上のように、本論文では保田のテキストを戦前から戦後にかけて見渡し、理論的に検討することを試みた。そこから見えてくるのは、美的なものへ逃げているという従来の保田の評価とは全く異なるものである。保田は理論的にもものを思考しており、政治とも無縁ではない。むしろ、時局のイデオロギーを意識しつつ、それとは異なる形で「日本」を考えようとしている。そこには問題も含まれるが、その理論や近代に対する批判には一定の見るべき点があると思われる。